

## 四 応仁の乱と郷土武士

### 大内教弘の治政

大内持世が急逝したあと、盛見の子教弘が大内家を継いだ。これを不満として、筑前守護代を務めた兄教幸が、大友持直・少弐嘉頼らと筑前で拳兵したが、間もなく鎮圧された。

大内教弘は、分国法『大内家壁書』を定めて、分国中の行程日数と請文の提出期限を定めて、政務の迅速化に努め、上洛することもせず、分国統治に力を入れた。豊前では、宇佐宮の整備が終わると、弥勒寺や諸社の再興にとりかかり、人心の収攬に心を砕いた。

また勘合貿易や朝鮮貿易に熱心で、その実権を競って、管領細川勝元と対立するに至り、伊予の河野氏を助けて、細川氏と戦うため、四国へ出陣したが、伊予興居島で病に侵されて、寛正六年（一四六五）没した。

### 大内政弘西軍へ

二十歳で家督となった大内政弘は、この年の暮れ、榎本伊豆守国忠へ「仲津郡伝法寺庄内小犬丸名二十四石七斗足」の地を宛行っている（『萩藩閩閩録』榎本文書）。小犬丸の名は現在行橋市景に残っているが、当町草場にも小字があり、各所に小犬丸の地名が残っているから、特定することは困難であるが、当町のそれと想定しておきたい。

大内政弘は、間もなく応仁・文明の大乱に巻き込まれ、上洛して、一方の大将として活躍し、大乱の帰趨



大内教弘の花押

を握る存在となった。

父教弘が姻戚河野氏を助けて、細川勝元と対立したから、政弘は応仁の大乱がほつ発すると、細川勝元に対抗する山名宗全に招かれ、これにこたえて、河野氏とともに、船二〇〇艘に分国の兵二万余を乗せ、途中、細川方の防禦網を突破して、応仁元年（二四六七）八月、入京し、劣勢にあった西軍に新たな活力を与えた。

大友親繁の

豊前支配

天皇と將軍を奉じる細川勝元は、大内政弘の領国周防・長門を伯父大内左京大夫教幸入道道頓へ与え、豊前を大友親繁へ、筑前を少弐頼忠（少弐教頼の子、のち政尚・政資と改名）へ与え

て、政弘の足元をぐらつかせようとした。

防長を与えられた大内道頓は、老齡を理由に、子の嘉加丸に家督を継がせたいと

幕府に許可を求め、大内政弘の留守を預かろうとしたらしい。

やがて、周防守護代陶弘護と対立し、合戦となった。

世上無為の事、去年一段、大内左京大夫政弘に仰せ合はされ候の処、先年の御

下知の通りをもって、道頓入道以下、周防・長門両国に渡海すべきの旨、一牧

軒道諲僧、上使と号し、近日なお所々に触れ廻ると云々、都鄙相違の条、然るべからず、所詮、道諲に

おいては不日上洛あるべきの旨、下知せしむ、これ等の趣、便宜の輩に申し聞かざるべきの由、仰せ下

さる所なり、よつて執達件の如し、

文明九年三月廿六日



足利義政の花押

（教弘元寇）  
大和守 在判

大友豊前守殿

この意味は、世の平和のため、大内政弘と將軍と話し合われたので、先年の大内道頓らと豊前から周防・長門両国へ渡海せよという命令を撤回する。僧一牧軒がなお所々へ触れ回っているといふので、この僧を至急上洛させよ。周圀の人々へもこれを知らせよというものである。

これ以前、豊前国は大友豊後守親繁ちかひによって占領されていたが、文明七年（一四七五）ごろ、親繁が返還したので、大内道頓に与えたところ、少弐頼忠が競望けいもうし、侵入してきたという。

大内教幸の挙兵

大内左京大夫入道道頓は、嘉吉の変  
（嘉吉元年＝一四四二）後、弟の教弘と家

督の座を争って挙兵し、失敗したあと、大友氏に庇護ひごされていたらしい。

応仁の乱が起こり、大内政弘が分国の兵を率いて大挙上洛した虚を衝いて、細川勝元の調略により、仁保加賀守盛安が動いて、防長両国を与えられ、備後の土一揆鎮圧合力のためと称して、文明二年（一四七〇）正月、安芸国廿日市へ出兵し、自ら安芸国境まで出陣した。

ところが、大内新介政弘の命令を受けた陶五郎弘護が、道頓と袂を分かち、彼を攻撃する形勢となったため、道頓は石見堺へ移動し、周布左近將監元兼へ、長門国より陶弘護を挾撃するよう依頼し、石見津和野の



大友親繁の花押

（有徳英彦）  
彈正忠 在判

（『大友家文書録』、原文は漢文）

吉見信頼の加勢を得て、長門国に侵入した。しかし、長門国賀年かねにおいて陶弘護軍に敗れ、豊前へ逃亡し、馬ヶ岳に籠城したが、文明三年正月二十五日自殺したという。大内道頼について、従来の諸書が誤った記述をしていることが、先掲の史料で明らかである。

**大内政弘の豊前・筑前奪回** 文明八年（一四七六）八月、將軍と和睦した大内政弘は翌年十一月帰国し、失った旧分国の奪回にとりかかった。文明十年八月、自身豊前へ渡り、九月、太宰府で抵抗する少弐頼を斬って、豊前・筑前を平定した。

九月二十五日には、杉彦六重治へ本領仲津郡石丸五町地などを還補げんぷするなど、知行宛行を発表し、十月三日、少弐方として行動した仁保新右衛門尉弘名が彦山座主頼有の計略で捕らえられ獄門に処せられた。

この月、太宰府の大内政弘のもとへ、続々と入国の祝言を述べべく出頭する者や御使がやってきた。その中に豊前国分寺住持（神代左馬允貞賢さだかたの弟）、守護代杉伯耆守武勝、鈴隈寺住持、馬ヶ岳城督右田弥三郎弘量、佐田因幡守忠景、仲間若狭守盛秀、彦山座主頼有法印とその子息帥律師もろの名があった（『正任記』）。

## 五 馬ヶ岳の合戦と郷土武士

**大内・大友の調略合戦** 父大内政弘に続いて、二十歳ぐらいの若さで大内家督の座に就いた義興よきは、前公方義材を奉じて入洛し、一〇年余りも幕政を牛耳ることになるが、その初期は、豊筑において、激戦きせんを

続けた。